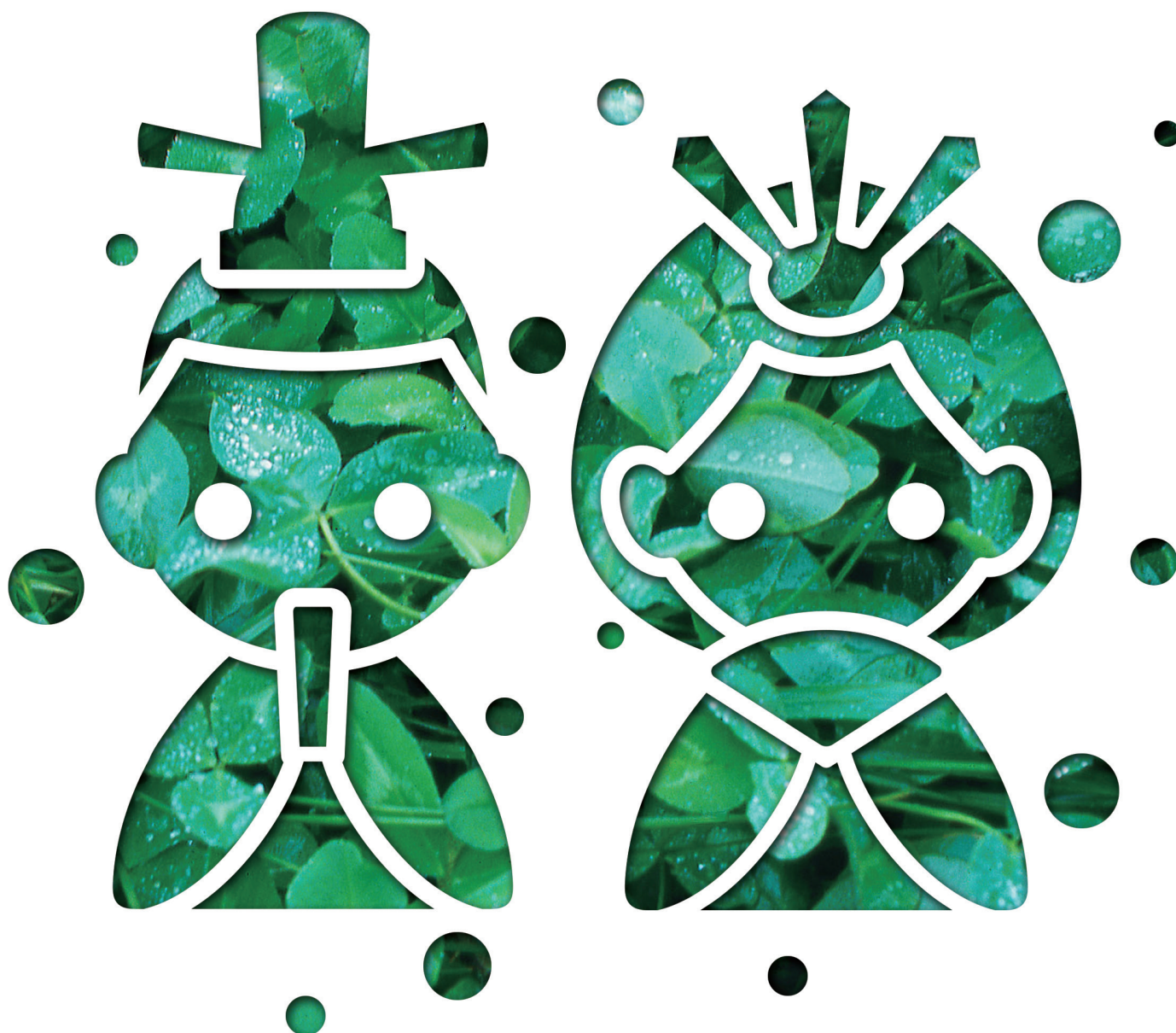




第22回 ライフ・ラーニング・メンバーズ交流会 報告

1月27日(水)、東京・霞が関の霞山会館にて、80名以上のご参加をいただき開催された第22回 ライフ・ラーニング・メンバーズ交流会の様子を写真中心にご報告します。



→理事長松田妙子は「私は88歳。皆さま、私よりも若いようなので、私以上に今年は頑張ってください」と激励。

↓乾杯は2020年オリンピック・パラリンピック組織委員会理事で日本陸連会長の横川浩さん。



↑小林史明衆議院議員は「私は財団と同じ1983年生まれ。感動する心と学びの姿勢を忘れず前進を」と。



↑特別助成金支給のネフェルティティの墓発掘調査をするリーヴス氏から報告。

↑博士号取得支援事業報告が、張競選考委員長と4人の博士号取得者から行われた。



80名を超える参加者が交流を図った。



←博士号取得者と挑戦者が多数で参加。

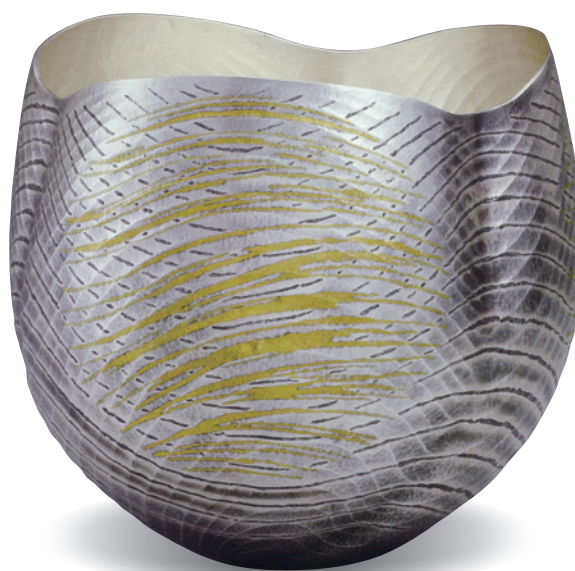


↓合唱はハーモニーが合った時の気持ち良さがあるからこそ楽しめるという倶楽部グループは「いい日旅立ち」ほか6曲を披露。

→テノール榛葉昌寛氏によるイタリアの歌「ヴォラーレ」と日本の歌「荒城の月」。



形をとどめない風や波から自分の形を見出す面白さ



銀打出花器「風韻」(2014年)

鍛金(たんきん)

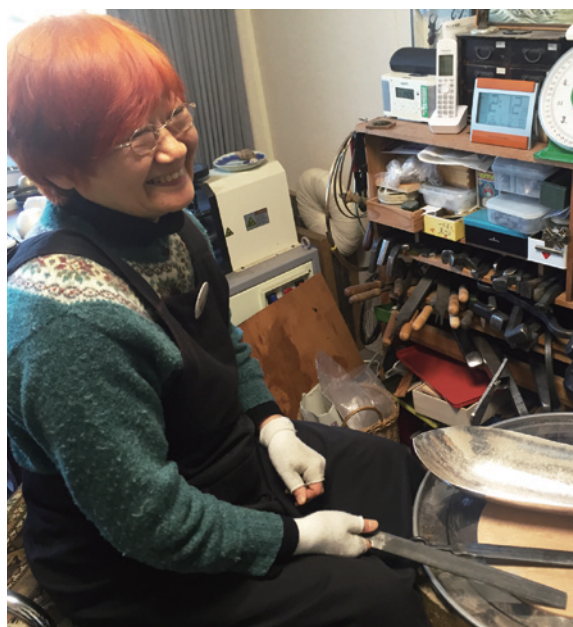
大角幸枝

Ohsumi Yukie

- 1969年 東京藝術大学卒業
鹿島一谷、関谷四郎、桂盛行に師事
- 1986年 第33回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞
- 1987年 第34回日本伝統工芸展 日本工芸会総裁賞
- 1991年 第1回香取正彦賞
第4回MOA岡田茂吉賞展 優秀賞
- 1998年 第28回伝統工芸日本金工展 日本工芸会賞
- 2009年 第56回日本伝統工芸展 日本工芸会保持者賞
- 2010年 紫綬褒章受章
第17回岡田茂吉賞展 MOA美術館賞
- 2014年 第61回日本伝統工芸展 日本工芸会保持者賞
第1回米国立スミソニアン協会客員作家に選定される
- 2015年 重要無形文化財保持者(人間国宝)認定



南鐐吊舟花生
「渡海」
(2015年)



「鍛金」で女性初の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された大角幸枝さん。鍛金とは下地となる金属を金鋸などで意図した形状にする技術のこと。さらに成形した器に布目象嵌など彫金の伝統技法を加え、ダイナミズムと気品を内包した作品世界が高く評価された。

——鍛金では女性初の人間国宝に認定されましたが。

職人の世界は特に男社会だったからしかたありませんが、そろそろ女性初とか珍しがられない世の中になって欲しいですね。作ったのが女だとか男だとか関係なく、作品を見ていただければと思います。

実は、鍛金で認定されたのは意外でした。元々私は彫金をやっていて、ボディは鍛金専門の人に作ってもらっていました。途中からボディも自分で作りたいと始めたのですが、両方を自分でやる人は少ないんですよ。

——金工に惹かれたきっかけは何ですか。

東京藝術大学に入ってからです。何か美術に関係する仕事はしたかったのだけど、やるなら西洋じゃなくて東洋文化だな、使えるものがないから工芸かな。で、いろいろ体験してみても、陶芸は土が掴みどころなく感じたり、漆はかぶれたので外したり、消去法と人がやっているのを見て面白そうに感じたのがきっかけでした。芸術学科の卒業生は研究家や学芸員になる人が多く、私のように作家になるのは珍しいんです。

——たくさん道具を使うんですね。

そう見えますか。師匠から「道具は少ないほうが良い」と教えられていて、私は少ない方だと思っているのですが、でも工芸に道具は欠かせません。たまたま昨日

テレビの取材があつて、このヤスリを作っている職人さんが主人公で、私はその道具を使っている作家という立場でした。私が作りたい作品に合わせた微妙なカーブのヤスリを作ってくれる、東京に1人しかいないトキミタいな職人さんです。良い道具がなくなると、私も思い通りの作品ができないかもしれないわけです。

——作品の制作工程を教えてください。

「渡海」の場合だと、まずは船をイメージしてスケッチします。素材の銀板は厚さ1・2mm、金槌で叩いて伸ばして形を作っていきます。焼鈍して柔らかくするため度々熱をかけます。形を作る際に重要なのが、金槌のほかにも、出したい曲線に合う当金^{あてがね}やヤスリなどの道具なんです。形によりませんが、ここまでで数か月かかります。船の形ができるとスミで下絵を描きます。角度を変えながら3重に鑿^{たがね}で布目切りをした後に、鉛箔や金箔を柳鑿で叩いて象嵌してから不要部分を切り剥がします。さらに金槌で箔を叩き込みます。最後に炭で研ぎ、鉛の色を変化させて濃淡を付けていきます。鍛金、彫金、布目象嵌という3つの技術をそれぞれの先生から学び、組み合わせて自分の表現にしてみました。

——風や波など明確な形のないモチーフが多いですね。そうですね。例えば誰が見てもわかる花の美しさそのまま写すよりも、形をとめない風や波から自分の形を見出す方が面白いんです。色合いも、以前は様々な金属の色を活かした作品を作っていたのですが、飾りをそぎ落とし最後に残った、モノトーンと金による深味と品格ある表現に今は愛着を感じます。

——伝統文化の継承についてはどうお考えですか。伝統技術と言っても、昔からあるだけでなく、現在に生きていないと意味がありません。鑑賞も使うことの一つではありますが、生活の中で使ってもらえるよう、講演やワークショップなども嫌がらずにやっていると

銀打出花器「鯨濤」(2012年)



【制作途中写真】

- ① 銀板を金槌で叩いて形を作る。
- ② 絵柄に合わせて3重に布目切り。
- ③ 象嵌する溝に箔を埋め込んでいく。



銀打出し花器「潜龍」(2009年)



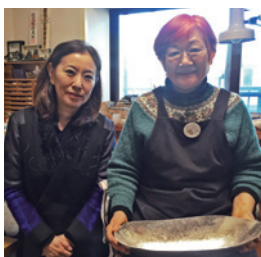
います。ただ、自分の作品を作る時間も大切なので、弟子は今1人だけです。進歩しないと教えがないので、確実に育つと思える人だけです。

——海外でも活動されていますね。

若い頃からインド、シルクロード、中東、エジプト、ブルガリアなどに行つて文化や金工芸に触れていました。40代だった1988年に、文化庁の芸術家在外研修員としてロンドンに派遣された際、西洋から東洋文化を見ることで、バチツと目が覚めた経験をしました。

日本は陶芸王国と言われて、陶芸以外、特に金工はあまり知られていません。海外では生活の中で金属が担ってきた文化が違い、金属製のものを持たない人が陶磁器で代用したという歴史があり、金工に対する評価が高く、知識も皆さん豊富なんです。なので海外の方が反応がよく、展示しがいがあります。

昨年、スミソニアン博物館で講演とワークショップ、展覧会を行いました。アメリカは歴史が浅い国なので、日本の伝統工芸には興味を持ってもらえます。若い人も活発で、少しでも多く吸収しようとしています。日本人も積極的な外に出て、たくさん見て、自らの世界づくりに役立ててほしいですね。自分の世界が確立できれば、自分の表現ができるからです。生涯学習という意味では、学ば人にとっても、社会にとっても、世界が広がることで意義があるのではないのでしょうか。



聞き手:上野由美子(左)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

カウンセリングだけでなく、自分も客観視できて意欲的に

■同じ苦しみを持つ人を一人でも多く救いたい

武澤充孝さんは、24歳の時にパニック症を患い、仕事をしながらも、16年間に及ぶ闘病で苦しんだ経験から、同様の疾患の人の役に立ちたいと考え、メンタルケアを学び始めた。

「メンタルケア心理士」は、不安、悩み、うつ症状などで苦しむ人を支えるのが目的だが、ただカウンセリングの技法を学ぶだけでなく、薬の知識や身体の仕組み、関係する精神疾患についてまで、深く学ぶのが特徴だ。テキストも「精神解剖生理学」「精神医学」「カウンセリング技法」と短期間で習熟できるものではないことが想像できる。

さらに上位資格である「メンタルケア心理専門士」は、うつ病を主とする各精神疾患に有効な「心理療法」を学び、健康な人が心を病まないようにするための予防政策など、より専門的なスキルを身につけていく必要がある。

闘病経験の有無と適性は別だが、興味を持つとそれに集中する性格の武澤さんは、通常2〜3年はかかることを1年半で取得した。

■学習塾でも心理学のエッセンスを活用

「ずっと学習塾をやっていますので、資格取得直後は、生徒の悩み解決や、受験の不安対策など、教育現場に心理学のエッセンスを取り入れました。昨今の子どもたちは対人コミュニケーションに問題があると感じています。社会人になっても困らない人間育成を心がけています。また、受験期の生徒にはストレス対処法を指導するなど、勉強の指導以外でも役に立っていると思います」

有限会社有心個別アカデミー 塾長
カウンセリングルーム優心 代表

武澤充孝さん

栃木県佐野市在住。1993年から個別指導塾を開講。メンタルケア心理専門士取得後、2012年にカウンセリングルーム優心を開設。地元の精神科医とも連携して治療に当たる。下写真は、企業のストレスチェック制度説明会で講師を務める武澤さん。



学習塾に使わない時間を活用して、2012年に「カウンセリングルーム優心」を開設した。訪れる人で多いのはうつ病だ。次いで、パニック症、自己変容、引きこもり相談など。精神科医からの打診で、病院と連携した治療に当たることもある。

■やっと始まった企業のストレスチェック

昨年12月から企業のストレスチェック制度が施行され、従業員50人以上の企業では義務化された。市の商工会議所主催の制度説明会で講習をしたほか、介護事業所などを中心にメンタルヘルス研修の導入

に向け、広報活動もしている。

「日本はメンタルヘルスに対しての認識が薄く、私としてはやっとという感じです。義務だからではなく、企業は大切な社員の心と身体の健康を護らないうちでやっていけない時代に突入したのです」

■どうせ学ばなら難しいくらいに資格に挑戦を

「苦しんでいる人の治療が一番の喜びですが、もう一つ、資格取得を通しての自己成長にも驚いています。自分を客観視できる自分がいることで、感情のコントロールができてストレス軽減につながります。もとは読書好きではなかったのですが、今は専門書を月に5冊のペースで読みながら、並行して最先端の治療を学ぶなど意欲的になりました」

資格取得後も、メンタルケア学会に入会し、フロイトから臨床心理までより深く学び、様々なセラピーの講習のため東京にも何度も通った。また、主にうつ病の治療に用いられる、日本で唯一認可されている認知行動療法を第一人者から学び身につけるなど、武澤さんの成長は続いている。

「確かに内容は難しいですが、メンタルケア学会で本物の心理カウンセラーの意味と知識を学べたことは良かったと感じています。将来を考えるなら、難しいくらいの資格チャレンジをおすすめします。昨年、『公認心理師』という心理職の国家資格創設が国会承認されました。具体的にはまだ明確にされていませんが、そこに向けても勉強していきたいと思っています。まだまだ世間のカウンセリングに対する認識や理解は不十分なので、周知活動と治療の両面から取り組んでいきます」